

日本海沖合大型スルメイカ漁場調査

担当者 技師 村 上 圭 郎

I 目 的

昭和37年度より本県沖合を中心に来游する沖合性の丈型スルメイカ漁場調査を実施しているが、本年度も引続き分布・洄游状況、漁場構成の要因となる海洋条件の究明を行ない、沖合大型スルメイカの漁場開発を推進する。

II 調査方法

1. 調 査 船 幸洋丸 (121.22本, 400PS)
2. 乗 務 員 船長以下19名
3. 調査期間 昭和38年8月22日～8月28日
4. 調査海域 北緯38度以北, 北緯42度以南, 日本海海域
5. 漁 具 スルメイカ1本釣漁具

III 調査経過

調査は9月上旬の太平洋海洋観測その他のため8月22日及び8月27日の2回で終わった。

IV 調査結果

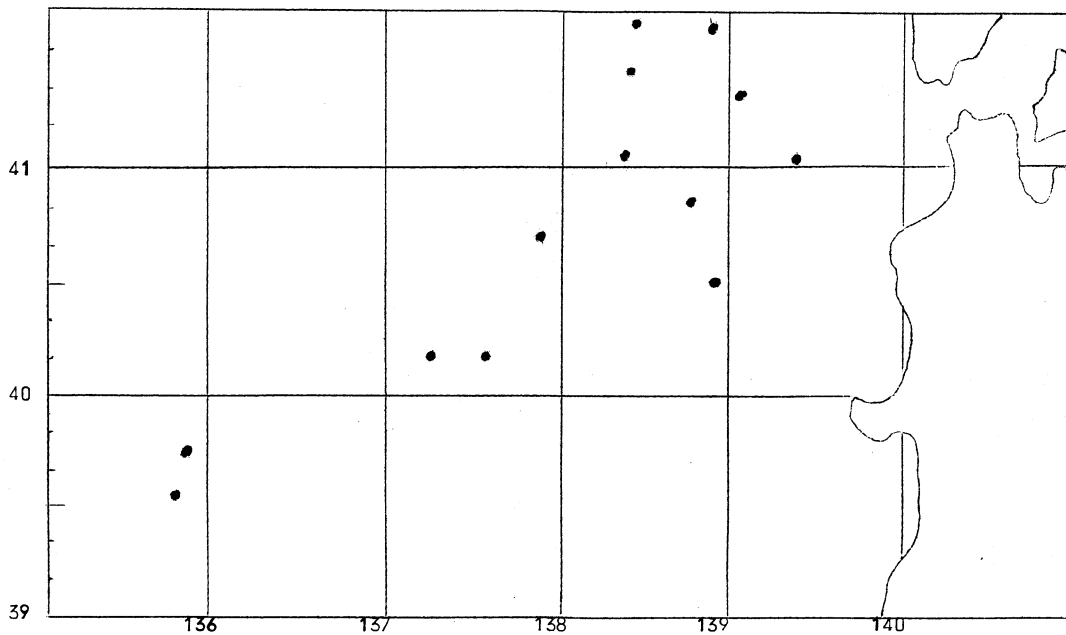
本調査は山口県以北の日本海側の各水試により大和堆を中心に調査が行なわれたが、本県は自県沖台を中心に調査を実施した。

38年は僅か二回だけで終わったが、第一次航海は鯨ヶ沢港より正西86浬、第二次は鯨ヶ沢港よりW1/2N60浬の海域で調査を行った。第一次に於ける釣獲試験は1時間1人当たり平均8尾と低調を極め、200尾の漁獲しかなかった。又、第二次では1時間1人当たり40尾で、群密度が低く800尾の漁獲で終わっている。第一次に於ける大型スルメイカ(27cm以上)の混入の割合は5%位で総体的なモードは22～24cm(平均体長22.5cm)にあり、49%を占め、平均体重は270gであった。第二次のモードは23～24cmにあり、30%を占め、(平均体長23.6cm)魚体の74%が22～25cmの間にあり、大型のものは4%であった。尚平均体重は280gで、漁場の海況条件としては表面水温と釣獲深度20m層との水温差が大きく、第一次では5.75℃、第二次では13.23℃とF層冷水の湧昇度が著しく、魚群の密度を低下させたものと思われる、これが釣獲試験の低調さに反映したものと思われる。

V 今後の課題

本年度は僅か航海、延2回の操業しか出来ず、得られた知見は乏しい。しかし8月下旬の本県沖合に来游したスルメイカの魚群密度は極めて薄く大型スルメイカ(体長27cm以上)の出現した割合は4～5%と昨年とほぼ同じ率であった。このことより従来、大型スルメイカの主な漁場としての大和堆から沖合を北上する対馬暖流第3分枝に乗り、本県沖合へ洄游してくるものと考えられるが、4～5%の混入率が昨年と同じように出現した点を考察すると本県の沖合は大型スルメイカの分布域の末端にあたり、第3分枝の消長、餌料生物の多少等が影響しているものと思われるので今後の課題としては、調査海域を拡大し、本県南部沖合をも含め漁場の開発に努め、スルメイカ漁業の振興に寄与する必要がある。

37年度漁場調査図



38年度

航海回数	第1次	第2次	海	深		
年月日	38・8・22	8・27	水	色		
位置	N	40°-36.0	40°-34.0	透	明	度
	E	138°-20.0	138°-42.0			
操業回数	1	1	水 温 値	0 m	24.5	23.3
釣獲時間	1800~2000	2030~2300		10	24.20	23.80
人員	10	8		20	18.75	10.07
天候	C	B		30	14.72	11.36
気温	23.0	22.5		50	9.89	10.25
風向風力	NE・2	ESE・2		75	6.99	2.35
気圧				100	5.55	2.06
波浪	1	2	釣獲尾数	200		800
ウネリ	1	1	平均体長	22.9	cm	23.6
流向			平均体重	269.9	g	280.1g